転換を表す接続詞「さて」「ところで」「では」をめぐって

甲　田　直　美

はじめに

前の表現と後ろの表現を転換の意味関係でつなげる接続詞としては、《さて》《ところで》《では》がある。

これらの接続詞は、先行叙述における文脈とは別の話題を提示する際に用いられるものであり、これらの接続詞の前の文脈と後ろの文脈とでは、とりあげられている話題が別の、あるいは新しい話題として提示されている。例えば、以下のような例である。

(1)　(何でもすぐ見つかりますね)

と、中原は、皮肉をいいかけて、やめてしまった。今のところ、この篤実そうな老人と喧嘩をする気はなかったからである。それに、少なくとも身元引き受け人なのだ。

「ところで、いい忘れましたが、一昨夜、妙なことが、二つありましたよ」

「どんなことでしょうか？」(西村京太郎『鬼女面殺人事件』)

(2)　……。とにかく、連絡会の出席率もいいし、申し合わせ事項も女子部は忠実に守る。

さて、今期の男子幹事会も平均年齢二十七歳という若さであり、また概して好男子が多かった。(松本清張『高台の家』)

1．《では》

《では》に関しては、浜田（1991）にその機能に関する研究がある。浜田（1991）は、《では》の機能として、以下のものを挙げている。

「デハ」の機能：「解釈」「推論（伝達・確認・補充）」「態度表明」「転換」

そして、《では》の転換の例として以下の例を挙げている。

(3)　では、次のニュースです。

(4)　では、ただ今より会議を始めます。

(5)　(クイズ番組で) では、次の問題です。

??ところで、次の問題です。

また、話題の転換として用いられる《ところで》との違いについて(5)の例を挙げて、次のようにその違いを説明している。

「トコロデ」との差：・「トコロデ」の後には新しい話題が提供されるのであり、変化の局面を宣言することはできない。
・「デハ」は必ず何らかの情報を受けているのに対し、「トコロデ」は情報を受ける必要はない。
・「トコロデ」による転換の場合には話し手が自分の意志で話題の転換をコントロールしている感じが強くなる。時には無理やり話を変えたような感じさえ与えるのはそのためである。

浜田の《では》に関する説明は正しいものだと思われるが、
「「トコロデ」の後には新しい話題が提示されるのであり、変化の局面を宣言することはできない」(40ページ)
という説明では、《ところで》と同様に、新しい話題提示の機能を果たす《さて》は宣言的発話と共起できるのに、《ところで》は共起できないのかの説明にならない。

(5)' [では]、始めます。
[さて]、始めます。
?? [ところで]、始めます。

浜田（1991）は、《では》のもつさまざまな機能を整理・記述したものであり、《では》のもつ【転換】の用法の記述としては、妥当なものである。しかし、《ところで》との違いについては、《さて》の用法を取り入れると、その説明に矛盾をきたしてしまう。《では》のもつ転換の用法については、浜田（1991）に詳しいので、以下では主に《さて》《ところで》をとりあげ、その意味・用法の記述を行う。

2．転換の接続詞に関するこれまでの研究

林（1983）は、「日本語の文の形と姿勢」に関する以下のような研究を行っている。

文の姿勢：現実の文は、言語の、より大きな単位である文章の中で作り出される。だから、すべての文は、文章の中に位置づくための姿勢をもっている。(pp.56)
文の姿勢のタイプ：始発型／承前型／転換型／自由型
始発型の文：一つの文章がここから始まるのだということを姿勢に表している文
始発記号、始発要素：「もしもし」、呼びかけの言葉、「今は昔」など
承前型の文：文章中の各文は、冒頭の一文以外は、原則として、先行文脈を受けつぐ立場にある。その受けつぎを文の姿勢としてもっているもの。
先行文脈を受けつぐための承前記号：「はい」「いいえ」などの返事用のことば、「こ」、「そ」なじの指示語のつく言葉、名詞句の受けつぎ、など
転換型の文：承前性と始発性とをかねそなえた文
転換記号：ところで、さて（始発記号でもある。始発性の勝った転換記号でもあ

る。)、次に（承前性の勝った転換記号）
自由型の文：その他

他の接続詞では、同一話題内において、先行文脈の受け継ぎを文の姿勢としてもっているが、【転換】の接続詞は先行文脈とは別の話題を導くものであり、【転換】の接続詞は転換型に、その他の接続詞は承前型に分類される。

林（1983）にあるように、【転換】を表す接続詞は、文脈における位置づけが他の接続詞とは異なるものである。林（1983）の研究は、「文章」という大きな枠の中で【転換】の接続詞を位置づけた点では評価できるものであるが、《さて》と《ところで》との違いは明確ではない。また、「始発性が勝った」という概念に対応する言語事実の指摘も見られない。これらの転換を表す接続詞の研究は、山口（1970）や森田（1982、1987）における意味記述以外には、これまで試みられることがなかった。
山口（1970）では、次のように記述している。

《さて》も《ところで》もどちらも話題の転換を表すものであるが、《さて》は、これまでのことについては、一応の区切りがついたという気持ちから、新たに次の話題を持ち出す場合に用いられることが多いが、《ところで》は、そこで区切りがついたという気持ちを必ずしも感じさせないものである。

また、森田（1982）では、《さて》と《ところで》の違いに関して、次のように記述している。

《ところで》も、話題の転換、新たに話題を持ち出すときに使う語であるが、これは、それまでの文章の流れとは無関係に、全く新しい話題へと突然移行するときにも用いられる。視点の方向転換である。したがって《ところで》は《さて》にかえられない場合が多い。

《さて》と《ところで》の違いにおいて、山口（1970）や森田（1982）における意味記述では、《さて》はこれまでのことについては一応の区切りがついたという気持ちから、新たに次の話題を持ち出す場合に用いられるものであり、《ところで》はこれまでの話題を変えて別の話題を持ち出すときに用いられ、そこで区切りがついたという気持ちを必ずしも感じさせないものである、とされる。しかし、「新たな次の話題」を持ち出す、ということと「これまでの話題を変えて別の話題」を持ち出す、ということの差が明確でない。また、「区切りがついたという気持ち」という表現についても曖昧である。
上の山口（1970）や森田（1982）の記述は、観察として妥当なものであるが、どちらも意味記述に終始しており、これらの接続詞の構文的ふるまいがどのように違うのかが明らかでない。また、具体例や現象の指摘も十分でない。ここでは、意味記述だけでは

なく、構文的ふるまいの違いをもとにもう少し掘り下げて考察を進めたい。

3．《さて》《ところで》を含む Discourse の構造

少し長いが《さて》《ところで》が用いられている以下の用例をもとに、《さて》と《ところで》を含む Discourse の構造を考えたい。

(6) 十二年前の田中―ブレジネフ会談のさい、田中元首相が念を押した。「未解決の諸問題の中に北方領土の問題も入っているのでしょうね。」ブレジネフ書記長の答えは「ダー(その通り)」だった。今回の会談では北方領土問題は平行線だったが、「ダー」の答弁の時代に立ち戻るまでには、粘りの外交が必要だろう。

さて、ゴルバチョフ氏はこれからの長い歳月、いかなる道を歩もうとするのか。閉鎖型か開放型か。中国が開放政策の道を歩みつつあるだけに、ソ連の歩みを注視したい。(朝日新聞　1985.3.16　朝刊１頁)

(7) 与え続けてきた母が、きょうは子から花を「もらう」立場に変わる。与えることができるところまで子は大きくなり、成長した。カーネーションの花はその喜びを確かめさせてくれるだろう。

ところで、そのカーネーションがバラや菊と同様に「香りの花」だといったら、首をかしげる人は多いに違いない。

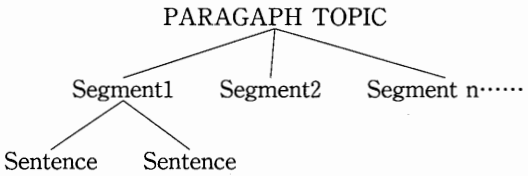
貝原益軒の『大和本草』に「紅夷（オランダ）石竹ハ大ニシテ香アリ」と書かれている。オランダセキチクとはカーネーションのことで、江戸時代初期に日本へ伝わっている。どんな香りかは記されていないが、……(朝日新聞　1985.5.12　朝刊５頁)

例(6)は日ソ外交についての記事、例(7)は母の日についての記事である。

ところで、Discourse の構造をとらえるには、二つの観点が存在する。一つは、その構造を階層的にとらえるもの、もう一つは線状的にとらえるものである。

《さて》と《ところで》を含む Discourse の構造を考えるために、Discourse の二つの側面をもとに例(6)(7)を図示する。

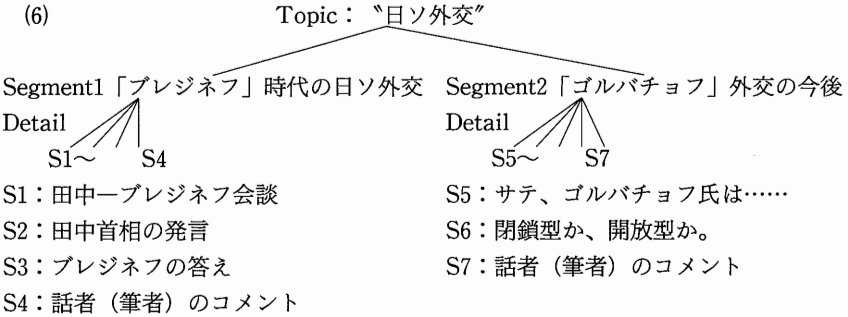
Hinds（1979）は、談話の構造を階層的にとらえ、概略的のような図を示している。



こうした談話の構造を階層的にとらえる立場にたてば、これらの例(6)と(7)は以下のよ

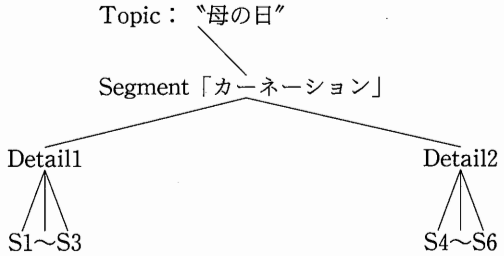
うな図が想定できる。

(6)



（S1～S7は Sentence 番号）

(7)



（S1～S6は Sentence 番号）

この図で、Topic は一連の文脈でとりあげられている話題、Segment はその下位の概念でいくつかの文や句から構成されるものである。

用例(6)と(7)の文章の構造において異なるのは、(6)は大きく二つの区分（Segment）から成り立っているのに対し、(7)は一つの区分（Segment）から成り立っているということである。(7)の《ところで》の前後は、「母の日に贈られるカーネーションの花」と「その香り」ということで話題が転換されていても、大きく〝カーネーション〟という一つの Segment として結束性が保たれている。一方、(6)の《さて》の前後は、前の部分は「ブレジネフ」時代の日ソ外交について、後ろの部分は「ゴルバチョフ」外交の今後について述べられている。どちらも共に〝日ソ外交〟について述べるものだが、《さて》の前

後はそれぞれ別のSegmentを構成していると考えられる。《ところで》の後には、「その」などの指示語を伴って先行文脈との関連を示すことができるのに対して、《さて》はその後ろに先行文脈との関連を伴うことが難しい[1]ことからも《さて》の前後はそれぞれ別のSegmentを構成しているといえる。このことを図示した場合、上の図のように、《さて》の前後は別のSegmentに属する（別のSegmentをつくる）が、《ところで》の前後は同じSegmentに属し、一つのnodeにつながっている。このような談話の構造が、山口（1970）の、《さて》はこれまでの話題に「区切りのついた気持ち」を感じさせるもの、という観察に結び付いていると考えられる。

また、談話の構造の線状的な側面をとらえる立場に立つならば、(6)と(7)は次のように図示できる。(Longacre1976, Hinds1977など)

(6) S1〜S4。〕〔サテ、S5〜S7

→

(7) S1〜S3。トコロデ、S4〜S6

これらの例から、次のような仮説をたてる。

どちらも新たな話題を導くという点では共通しているが、

『《さて》は、先行文脈とは別の新たな枠（Segment）を設定する働きをもつ。《ところで》には、枠の設定という機能はない。』

以下に、《さて》と《ところで》の構文的ふるまいの違いを指摘しながら、この仮説を検証する。

4．先行文脈との関連

【転換】の接続詞《さて》と《ところで》はどちらも共に、先行文脈とは別の話題を導くものとされる。しかし、先行文脈との関連において《さて》と《ところで》は異なる点がある。

(8) ［ところで］、さっきの話だけど……

(8)' ??［さて］、さっきの話だけど……

《ところで》は、先行文脈との関連を示す語（例えば上の用例の「さっきの」など）とも共起でき、(8)のように話の流れを戻すことも可能である。これに対し、《さて》は先行文脈における話題へ立ち戻ることは難しい。

一方、次のように相手の意向を伺うような文では、

(9) ［さて］次に行きましょうか。

(9)' ［ところで］次に行きましょうか。

(9)'の文が自然な場合には、もうすでに次に行くことが決まっているようなよみがある。

《さて》は新たな枠を設定しているので、枠を越えて戻ることができないが《ところ

で》は先行文脈に戻ることができる。《さて》と異なり、《ところで》に枠が設定されていないことは、先行文脈との結束性を示す語との共起からも窺える。

《さて》では、《さて》の前にある文脈での話題には、一応の区切りがついたものとして、次の新たな話題を提示するものであるため、区切りのついた前の話題へ戻る意味で用いられにくい。それに対し、《ところで》では、《ところで》の前の話題に必ずしも区切りがついていないため、その話題に立ち戻ることもできる。

(10)　(逸見政孝氏逝去のニュースの後)
「ご冥福をお祈りいたします。[さて]、経済です。」(1993.12.27「ニュース COM」での木村太郎アナウンサー)

(10)'　「ご冥福をお祈りいたします。?? [ところで]、経済です。」

《さて》は、これまでの話題が一応終わったものとして、次の話題を提示するものであるが、《ところで》はこれまでの話題に区切りがついていないが次の話題に移るといったニュアンスがある。それゆえ上の例では、《ところで》を用いると変な印象を受ける。

《ところで》の前後には、話者の枠の設定や区切りがついていないため《ところで》は先行文脈との関連を示すことができるが、先行文脈と区切りのついた文脈(上の(10)など)では、《ところで》を用いると不自然になる。これと逆に《さて》は、文脈上の区切りがついた、ということを表示するマーカーであるといえる。

5. 後続文の文類型

転換の接続詞《さて》《ところで》にどのような種類の文が後続することができるか、について、平叙文、疑問文、遂行文といった文類型との共起関係をそれぞれ調べていく。

5.1　平叙文との共起

《さて》も《ところで》もどちらも平叙文とは自然に共起できる。先の(6)(7)でこの型の例は論じたのでここでは省略する。

5.2　宣言的発話との共起

《さて》は、遂行的な文や宣言的発話と共起できるが、《ところで》はそれができない。

(11)　天気予報はこれで終わります。[さて]次は交通情報です。

(11)'　天気予報はこれで終わります。?? [ところで]次は交通情報です。

(12)　(みなさんお集まりのようですね。) [さて]始めます。
?? [ところで]始めます。

また、《さて》は、

(13)　（会議などの場面で）［さて］始めます。

(13)'　　??［さて］始めるつもりです。

のように(13)'における「〜スルツモリダ」のような意向を表す形とは共起しにくい。(13)'での「〜スルツモリダ」という表現は、個人的な意志の表明であり、動詞の単純形の(13)のように宣言的発話とはならない。このことから、《さて》は宣言的発話と共起できるだけではなく、新しい局面の導入をするものでなければならないといったことが考えられる。

(13)のような宣言的発話では、始めるかどうかということはこの発話によって初めて提案されるものであり、この発話に先立って定まっているというものではない。このような新しい局面を導入する際に《さて》が用いられる。

平叙文との共起において、《さて》は先行文脈から区切りをつけて新しい枠を設定するものであると述べた。宣言的発話との共起からも、《さて》はこれまでの文脈における意味場とは異なった新たな意味場の構築を果たしているといえる。この用法は、《ところで》には見られないものである。

《ところで》に関しては、

(14)　（会議などの場面で）　??［ところで］始めます。

cf.［ところで］そろそろ始めましょうか。

といったように、発話時点に先立って、もう始まる予定であった場合には用いることができる。このような点からも、《さて》と《ところで》はそれに後続する表現と先行文脈との関わりにその違いがあるといえる。

5.3　情報要求文との共起

《ところで》は、実際の用例を調べていくと、疑問文が後続している用例が多くみられた。

(15)「お風呂はないから、毎日、身体を拭いてたのかしら？」
「まず、そうだろうね。ここは南の島だから、年中、水で拭いても苦にならない。それに、この島は、珍しく水に恵まれている。［ところで］、君なら、いつ身体を拭くね？」
「たいてい朝ですわ。あたしは、シャワーを浴びるだけですけど、朝、シャワーを浴びると一日中、気持ちがいいですもの」（西村京太郎『鬼女面殺人事件』）

(16)「いや。巫女のために、簡素な神殿が造られています。そこに籠っておいでです。それから、名前を呼ぶのは、止して頂きたいですね。半月の間は、祖霊を祭る巫女なのだから」
「わかりました。［ところで］、犯人の見当はついたんですか？」（同上）

《ところで》は、これまでの文脈からはずれるが、という断りのマーカーとして用い

られる。上の用例で、《ところで》を削除すると、唐突な感じを与える。

(16)' 「わかりました。犯人の見当はついたんですか？」

《ところで》は同じ話題の枠（Segment）内にあるから、その枠の中で話題を変える場合に省略すると唐突な感じを与えるのである。

《ところで》は話に割って入る場合などに用いられることが多いが、それは、その前後での話題の結束性は認識されていて、その中に割って入るというニュアンスがあるから《ところで》が用いられると考えられる。《さて》の場合には、話に割って入るというよりは、新しい話題を始める、という意味合いが強い。

次に《さて》と疑問形式との共起とを考える。《さて》と疑問形式が共起している例を以下に挙げる。

(17) オーバーランという言葉には、走り越す、ふみにじる、(堤防を)越えてはんらんする、はびこる、などの意味がある。[さて]、司法のオーバーランとは何だろう。中曽根首相のオーバーラン発言が尾をひいている。(朝日新聞　朝刊1頁　1986.1.10)

(18) 初めて社会に出た日のことは、みんなよく覚えているものだ。それだけ印象の深い、人生の大きな区切りなのだろう。[さて]、これからどんなふうに歩いていったらいいのか。はっきり決めている人もいると思う。(朝日新聞　朝刊5頁　1989.4.3)

(19) 孟子「いま鼓（つづみ）がなって、いくさが始まったとします。ある部隊では、武器を捨てて百歩も退却しました。別の部隊は五十歩退却して止まりました。[さて]、五十歩の連中が百歩の連中を笑えるでしょうか」

恵王「それは、ムリだな」

そこで孟子は、善政のつもりでも真の善政からみれば、梁も隣国とそう変わらないのだと戒める。(朝日新聞　朝刊5頁　1989.1.7)

これらの例にあるように、《さて》と共起している疑問形式は、純粋な情報要求文ではなく、新しい話題や課題の導入の役割を果たしていることが多い。

《さて》を用いた疑問形式は、単なる情報要求文というよりは次のTopicを導く、話題や課題の提供をしているといえる。それに対し、《ところで》の場合は、何らかの先行文脈からの切り替えをするもので、情報要求文も共起しやすい。

また、《さて》は

(20) [さて]私達はどこに行くんだろう。

(21) [さて]始めるとするか。

といったように、独り言などで用いられることがあるが、これは山口（1970）にもあるように《さて》の感動的用法であり、文脈の流れの中で転換の用法であるとは言いがたい。

《ところで》は情報要求疑問文とも共起できるが、《さて》は共起しにくい。《さて》が疑問形式と共起している場合には、純粋な情報要求文ではなく課題の提示をしている場合や感動詞的な用法に限られる。

ところが、《さて》が情報要求疑問文と共起できる場合がある。次のような場合である。

(22) さて、次は何の話にしましょうか。[2]

話題の選択に関することや、次の文脈の枠を設定する内容になっている場合には共起することができる。

5.4 後続できる文類型

《さて》と《ところで》に後続できる文類型をまとめると次のようになる。

	平　叙　文	情報要求文	宣言的発話
サテ	○	*	○
トコロデ	○	○	*

(*：共起しにくい)

《さて》の基本的機能は「話題の提供」、《ところで》の基本的機能は「話題の切り替え」であるということができる。《さて》と《ところで》の基本的機能をこのようにとらえることにより、宣言的発話や疑問形式との共起が説明できる。

《さて》は、「話題の提供」をその基本的意味とするので、情報要求文のような話者がその情報をもっていない形の文と共起することは難しい。《ところで》は、先行文脈からの「話題の切り替え」をその基本的意味とするので、談話の冒頭における宣言的発話のように先行文脈のない場合には切り替える、という意味とずれてしまうため、共起しにくい。《ところで》が宣言的発話と共起する場合には、(「ところで、そろそろ始めましょうか。」など) 話に割って入る場合や、前から「始める」という状況があった場合などのときであり、《ところで》は先行文脈を必要とする。なぜなら、それは《ところで》が、先行文脈からの「切り替え」の意味を持つからである。《さて》は、話題の提示や提供をその基本的意味とするので、先行文脈なしでも、《さて》でその発話を始めることができる。

6．おわりに

【転換】の接続詞《さて》《ところで》の違いを記述するには、Discourse という大きな言語単位の中での位置づけが必要となる。Discourse に階層性を認めるという立場に立ち、「Topic」とその下に「Segment」というレベルを想定するなら、《さて》はその一つの「Segment」が始まる談話標識であり、接続詞《さて》の前後の表現はそれぞれ別の「Segment」に属する。一方、接続詞《ところで》の前後は、少なくとも《さて》よりは結束性があり、同じ「Segment」に属する。同じ「Segment」の中で、異なる話題として提示するものである。ここでいう「Topic」と「Segment」という単位は、扱う Discourse の大きさによっても変わってくるが、前者が後者より上位の概念であることには変わりがない。「Topic」と「Segment」という階層の概念により、以下の説明が可能となる。

《さて》はより始発性の勝った転換の記号であり、《ところで》は、話題の転移を表す転換の記号であるとされる（市川1976など）。これは、《さて》が一つの「Segment」の始めにあり、《ところで》の前後にある内容は同じ「Segment」内にあるからである。同じ「Segment」内にあるので前の話題に戻ることもでき、前の話題を引きつぐ指示語などとも共起できる。《さて》は、その前後の内容が別の「Segment」に属するので、《さて》の前件と後件では区切りがついた印象を与える。《さて》は新たな「Segment」を構築するので宣言的発話と共起できるが、情報要求文とは共起できないといえる。それに対して、《ところで》は新たな「Segment」を構成しないので、新たな局面を形成する宣言的発話とは共起できないが、情報要求文とは共起できる。情報要求文は、その典型として話者が聞き手に情報を要求するものであり（従ってその典型として話者は情報をもっていない）、新たな話題を設定する《さて》とは共起しないが、《ところで》とは共起できる。

ここで「Segment」という用語の是非には立ち入らないが、Discourse における「Topic」という概念の下位の概念の話題の枠（これを Segment とよんでおく。）を想定することにより、談話中における【転換】の機能が説明しやすいように思われる。談話内で、話題を【転換】していても、より大きな「談話」という言語のまとまりの下に統括されているのであって、「談話」とその中の個々の「話題」との階層性に着目した方がより有効な説明が与えられるからである。

注

1　次項を参照。

2　森山卓郎氏は、社会言語学の講義（1990年）で、サテを用いるのはプランをもった人物でなければならない、と指摘された。サテが手紙などの一方的叙述で多用されることを考えてもこの指摘はある面では、正しいと思われる。新しい話題の提供をすることから、話者がプランをもっている場合が多いと考えられるが、しかし、この(22)の例からも、必ずしもプランを持っているとは限らないといえる。

参考文献

市川　孝　1976「副用語」『岩波講座・日本語・6』岩波書店

浜田　麻里　1991「「デハ」の機能―推論と接続語―」『阪大日本語研究3』大阪大学文学部日本学科

林　四郎　1973『文の姿勢の研究　言語教育の基礎論1』明治図書出版

――――　1983「日本語の文の形と姿勢」『談話の研究と教育Ⅰ』国立国語研究所

森田　良行　1967「文法―条件の言い方」『講座　日本語教育』3、早稲田大学語学教育研究所

――――　1982「接続詞・副詞類各説」（『日本語教育辞典』）大修館

――――　1987「文の接続と接続語」『日本語学』6－9

――――　1989「Ⅱ連文型」『談話の研究と教育Ⅱ』国立国語研究所

山口　堯二・他1970「接続詞小辞典」『月刊文法』2－1

John Hinds　1977 "Paragraph Structure and Pronominalization", *Papers in Linguistics*, 10

――――　1978 "ANAPHORA IN JAPANESE CONVERSATION", ANAPHORA IN DISCOURSE John Hinds (ed)

――――　1979 "ORGANIZATIONAL PATTERNS IN DISCOURSE", Syntax and Semantics 12

Longacre, R 1976 *An Anatomy of Speech Notions*, Peter de Ridder Press Lisse
Schiffrin, D. 1987 *Discourse Markers*, Cambridge University Press

（京都大学大学院　博士後期課程）